

平成 30 年度  
横浜市立高等学校  
自己評価書

横浜市立横浜サイエンスフロンティア  
高等学校

## <学校情報>

1 課程・学科 全日制課程・理数科

2 学校長 永瀬 哲 (平成31年4月1日現在 在職1年目)

### 3 学校教育目標

- 1 広い視野、高い視点、多面的な見方を身につけさせ、ものごとに対する柔軟な思考力・解析力を培い、論理的頭脳を養う。
- 2 旺盛な探究力、豊かな創造力、世界に通じるコミュニケーション能力、自立力を培うことによって、よりよく生きる知恵を養う。
- 3 社会における己の使命を自覚し、積極的に社会に貢献しようとする志を養う。
- 4 人格を陶冶し、有為な社会の形成者としての品格を養う。
- 5 幅広い知識と教養を身につけ、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな心身を養う。

### 4 教育方針

驚きと感動による知の探究

《教育理念》

学問を広く深く学ぼうとする精神と態度を培いながら、生徒一人ひとりが持つ潜在的な独創性を引き出し、日本の将来を支える論理的な思考力と鋭敏な感性をはぐくみ、先端的な科学の知識・技術、技能を活用して、世界で幅広く活躍する人間を育成する。

### 5 教職員数 (平成30年12月1日現在)

学校長	<u>1</u>	校長代理	<u>1</u>	副校長	<u>2</u>	事務長	<u>1</u>
主幹教諭	<u>7</u>	(男 <u>6</u> 、女 <u>1</u> )	教諭	<u>66</u>	(男 <u>44</u> 、女 <u>22</u> )		
養護教諭	<u>2</u>	実習助手	<u>1</u>	事務職員	<u>3</u>		
A E T	<u>2</u>	非常勤講師	<u>10</u>				

6 生徒在籍数（平成 30 年 12 月 1 日現在）

年次（学年）	学級数	男子	女子	合計
1	6	170	64	234
2	6	171	67	238
3	6	181	56	237
合計	18	522	187	709

7 回収率

		依頼数	回答数	回収率
教職員		98	98	100%
生徒	1年	235	235	100%
	2年	238	234	98.3%
	3年	237	234	98.7%
	合計	709	703	99.1%
保護者		708	636	89.8%

8 自己評価実施日

教職員	平成 30 年 12 月 5 日～平成 30 年 12 月 21 日
生徒	平成 30 年 12 月 5 日～平成 30 年 12 月 14 日
保護者	平成 30 年 12 月 5 日～平成 30 年 12 月 21 日
地域	平成 30 年 11 月 5 日～平成 30 年 12 月 21 日

9 集計・分析期間

平成 31 年 1 月 15 日～平成 31 年 1 月 27 日
-----------------------------------

10 自己評価書の公表方法・時期

○集計結果は平成 31 年 2 月下旬、分析については、令和元年 5 月中旬以降本校ホームページで公表の予定

## <自己評価>

### 1 第2期横浜市教育振興基本計画の推進状況

#### □魅力ある高校教育の推進状況

(関連アンケート番号：教職員 1, 2, 3, 9, 10, 13, 14 生徒 I -1, 6 保護者 I -1 II -1 経年変化 1, 2, 5, 10)

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市立高校のパイオニア校、理数科専門学科高校として、次代を担うグローバルな視点をもつ科学技術人材を育成するために魅力ある6年間の中高一貫教育校としての教育課程を編成している。特に学校設定教科「サイエンスリテラシー」により自ら学ぶ力を身につけ、先端科学の様々な分野の学習を深め課題探究型学習を実践している。30年度は「サイエンスリテラシーI」の取組内容を中心に、より一層生徒が主体的・能動的に学ぶことができるカリキュラムの改革を行った。</li> <li>・ スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定2期目の4年目、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受けて5年目を迎え、両指定を融合し「サイエンスの素養」と「コミュニケーション力」を育成するための課題研究の充実を図るため、大学や企業等の科学技術顧問との連携により、専門的な指導をいただくとともに、国内外の大会や発表会を積極的に活用した。</li> <li>・ 進学指導重点校として、生徒の進路希望実現のため、進路指導部を中心に各年次と連携を図り、3年間を見据えた計画をたて、土曜講習や長期休業期間の講習等を積極的に行った。さらに高大接続や学習指導要領改訂にともなう教育改革について教職員を対象とした定期的な研修会を実施し、共通理解を深めた。</li> </ul>
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本校の使命を理解して、魅力ある高校作りに前向きに取り組む教職員が90%以上であり、教育課程の編成、取組みについても肯定的な職員が90%を超えている。これは本校の教育理念や内外からの大きな期待を教職員がしっかりと理解し、実践している結果である。（1ページ教職員アンケート 1, 2, 3 12ページ経年変化 1, 2）</li> <li>・ 本校の中心である課題研究を行う学校設定科目「サイエンスリテラシーI」の取組内容の改革を実施したことにより、生徒が主体的に学ぶ姿勢をより高く持つようになった。（3ページ生徒アンケート 1-1年）さらに、「サイエンスリテラシーII」、「グローバルスタディII」における個人研究を通して、自らが課題を設定し、年間指導計画をもとに教職員の調整や生徒への意識づけを丁寧に行い、1年間探究活動に取り組んだことは大きな成果である。教職員間でもこの科目をカリキュラムマネジメントの中核としてタブレット端末を活用した研修会を</li> </ul>

<p>成 果</p>	<p>実施するなどして、職員の意識の共有化を図った。(2 ページ教職員アンケート 13, 14, 7 ページ保護者アンケート教育活動等について 1)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>進学指導重点校として、平成 29 年度卒業生は国公立大学合格 40%以上を実現する成果をあげた。これは、学校全体で進路指導の充実や生徒の進路実現のため、生徒に関する情報の共有・周知による生徒一人ひとりを丁寧に指導していることや卒業年次担当者による振り返りとアドバイスなど学校全体として教育の質を高める実践研究を行うことにより、学校全体の指導力が着実に向上し続けている。(1 ページ教職員アンケート 9, 10 2 ページ 14 4 ページ生徒アンケート 6 7 ページ保護者アンケート I-2, II-1)</li> </ul> <p>さらに、進路指導部を中心に高大接続改革に関わる教育改革の報告会や研修会を実施し、今まで以上に教科間での連携が強化されるとともに教科内での指導内容や指導方法の工夫が見られた。(13 ページ経年変化 5, 10)</p>
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成 31 年度は S G H の指定が終了するのに伴い、今まで蓄積してきたグローバル部門の展開を S S H の活動の中にいかに吸収し発展させていくかが大きな課題である。</li> <li>開校 11 年目を迎え、多くの職員が異動する中、業務の円滑な引継ぎと学校経営に関する職員の意識の共有を徹底することが重要である。</li> </ul>
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本校の目指す教育や特色ある教育活動について、全教職員が認識を共有し、同じ方向性を持って指導にあたるように、職員会議や職員研修会等、さまざまな機会を通して周知を図り共通理解を深めていく。</li> <li>28 年度から担当部署で取り組んでいる本校の基盤となる「サイエンスリテラシー」の充実をさらに進める。研修会を実施し、I C T の積極的な活用を含め、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善に取り組む。</li> <li>進路実績については、進路指導部と教務部とが連携し、科目選択や模試データ分析を含めた在校中の学習分析を通して、本校の学習指導や進路指導のあり方をデータに基づき検証する。</li> <li>本校が期待する生徒の受入について、入学者選抜の結果データを検証し、入学後の学習状況や進路実績の相関関係等を分析し、選考基準等の見直しを図っていく。</li> <li>31 年度は S S H 校指定の最終年度となるが、特色ある教育活動を持続的に行うために、3 期目の指定および人材重点枠の指定に向けて、「サイエンスグローバル事務局」を中心に S L 運営委員会との連携を密にし、教職員全体で共通理解を持って事業の開発に取り組む。</li> </ul>

## 2 教育活動の状況

### □教育課程の状況

(関連アンケート番号：教職員 2, 3, 4, 5, 6, 18、生徒 I-1、保護者 I-2)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理数科としての特色ある教育課程を生徒全体に理解してもらい各自目標とする進路に合った科目選択が実現するように教育課程主催の科目選択説明会、各年次による面談や学年集会などを通して理解を深めさせ、さらに7月の予備調査を経て11月の本調査を実施してきた。特に2年次では予備調査結果により本調査でより多くの生徒の希望が叶うよう選択科目群の調整を行った。更に2年次では進路選択の幅を狭めないよう幅広い科目選択を目指し1期生からの選択科目履修単位数と進路先(設置者別の大学)について示し安易な科目選択に向かわないよう指導を行った。</li> <li>・職員への研修では、30年度までの研修テーマを変更し「サイエンスリテラシーI(学校設定科目)でのカリキュラムマネジメントの実現」をテーマに各教科・科目の関わり方を全職員に理解してもらうために実施した。</li> </ul>
取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・28年度より導入した校務システムの基本的な運用方法が確立され、さらに学習指導要録作成機能の追加でデータを一元管理するシステムが完成した。これにより単位修得・履修及び卒業要件の確認など高等学校としての基盤となる単位履修・修得についての管理が容易になるとともに安全で確実なものになった。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートの集計結果では「十分に実現できている」に絞って成果をみていきたい。また比較は29年度の結果と行う。 「平成30年度学校評価アンケート経年変化」で見えていくと教務部が関わる部分ではほぼすべての項目でポイントが低下している。 特にP1【教職員3】(29年度比-18)では大幅な低下がみられる。これらは学校教育目標や中期経営計画に示す目標についての結果であるが、大きな要因の一つとしてSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の「科学技術人材育成重点枠」の不採択となった事実が中期目標に掲げられているSSHでの実現目標に制約が加えられることが考えられる。 また、教育課程や指導計画等に関する項目ではP1【教職員2】(29年度比-7)及び【教職員】3、(29年度比-5)となっている、これについては科目選択や科目の内容などの理解を上記【取組】で示した内容で実施したが特に2年次では3年次に設定されている科目の内容が生徒要望・実態からずれ始めていることも考えられる。更に選択科目群の設置方法や調整方法など30年度と同様の手順で行ったが要望に沿えないこともあったと考えられる。</li> <li>・指導内容や評価についての項目P2【教職員5,6】(29年度比-2)は微</li> </ul>

	<p>減であると考えられる。各教科別の生徒授業評価アンケートでも大幅な低下は見られないが日々の授業、各学期の評価などは常に振り返りを実施し改善点を見出し改善していくことが求められると考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・職員研修に関する P4【教職員 18】(29 年度比+7) と若干上昇がみられる。これは職員研修を従来の内容から一変し【取組】に示す内容で特定の科目に絞って実施したことが全職員に対して新たな取組みの目標を与えることになったのと、本校の特徴的な科目についての理解を深めたことが考えられる。</li> <li>・校務システムの活用についてアンケートに具体的な項目はないが、30 年度の運用実績をみると職員の校務（特に成績処理について）に関わる時間の大幅な短縮と記載ミス等の根絶に大きな役割を担ったと考える。これは、データを一元管理しているため入力、訂正は一度で済み、出力はすべて同じ場所に保存されているデータを利用するため個々の帳票での確認作業が大幅に少なくなったためであると考えられる。</li> </ul>
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中期学校経営方針についての項目で大幅な減点要素になると思われる SSH での指定については直接関わる部署が中心となり再指定を目指している。それ以外の生徒全体に関わる基礎的な部分（選択科目を含む教科・科目の指導内容や目標、及び評価方法）について現状の生徒の希望や特性などを考慮して改善点を見出すような働きかけを行い知識の定着とその知識を使いこなす知恵を身に付けさせることが重要と考える。</li> <li>・教務部の今後の課題として、実務の面では校務システムを活用し特に進路指導部とは連携を深め生徒に関する様々なデータを共有することで新教育課程編成の考え方の元になるデータの収集や進路指導への活用、さらに高校入試での本校の合格基準設定のための基礎データの提供など今まで各部署で分散して管理していたデータを他の部署でも効果的に活用できる環境を整備していきたい。また、教育課程委員会とも連携し職員研修会を更に充実したものとするように検討していく。30 年度に実施した研修は今後も継続的に実施しさらに新教育課程への移行に向けた研修及び本校設立の意義についての理解を深め理数科として編成されている科目について職員全体の理解に足並みが揃うような状況を作っていく。</li> </ul>
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新教育課程へ対応すべく「各教科のグランドデザイン作成」「SL I を軸にしたカリキュラムマネジメントの実践」「高大接続改革に対応する教育課程の研究」を念頭に職員研修会等を実施していく。</li> <li>・校務システムを利用した成績・学籍管理を完成させるべく他分掌との連携をとり進めていく。特に生徒指導要録の運用については 31 年度より実践していく。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒に対しての科目選択説明会や進路集会、保護者に対しての各年次の保護者会等での本校の教育課程の特色の説明を丁寧に行う。また、引き続き卒業生の科目選択状況と進路状況の分析を行い、科目選択指導に活用する。</li> <li>・理数科としての教育課程の特徴について理解を深め、幅広い分野への進路選択をしている現状に対応した選択科目成立を目標に職員全体で取り組んでいく。</li> </ul>
--	--

## □進路指導の状況

(関連アンケート番号：教職員 10、生徒 6、保護者Ⅱ-1)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年次ごとに実情に即した指導計画を作成し、実施した。</li> <li>・1年次校内研修、2年次分野別ガイダンス、卒業生による進路フォーラム、医療講演、大学訪問など、進路について考える機会を設けた。</li> <li>・土曜講習、夏期講習、特別時間割などで、通常の授業とは異なる講習を設定し、多様な学習の機会を設けた。</li> <li>・年次集会や年次保護者会において、学力状況や進路情報、今後の課題など、教員や予備校関係者による情報提供を行った。</li> <li>・三者面談に年次教員が共通の認識を持って臨むことができるように、面談準備の年次会議を行い個別に検討した。</li> <li>・校内模試を精選し、生徒が振り返りを行う時間を確保した。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年次が進むにつれて進路に関する情報の理解が進んでいるのは、進路行事を通じて情報収集を行い、自己の振り返りを行った成果である。(p. 4)</li> <li>・保護者も同様に年次進行につれ評価が高まっていくのは、年次集会などで情報提供を積み重ねた成果である。(p. 8)</li> <li>・多くの教職員が指導を肯定的に評価しているのは、生徒個々の進路実現のために、学校全体として講習、進路相談を行っている成果である。(p. 1)</li> <li>・1年次保護者・生徒の肯定的な評価が他年次に比べて低い(p. 4、p. 8)のは、高大接続改革について情報不足を感じているためと推測できる。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高大接続改革の進行状況を把握し、必要な対応を行い、適切な時期に情報提供を行うことが課題である。</li> <li>・A0入試、推薦入試の希望者増加に対し、指導方法・体制を整える必要がある。</li> <li>・1年次の校内研修について、3年間の進路指導計画の中での位置づけを明確化し、継続できる行事にしていくことが課題である。</li> </ul>



改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高大接続改革に関しては、校外の説明会、シンポジウムにできる限り出席し情報収集を行う。情報を整理し確定した事項に関して、生徒、保護者、職員に対して情報提供を行う。</li> <li>・ A0 入試、推薦入試希望生徒に対しては、一般入試への準備も怠らないように指導する。職員体制は、3 年次担当職員や進路指導部職員に加え、サイエンスリテラシーⅡ（2 年次に実施する課題研究）授業担当者にも協力を依頼する。</li> <li>・ 1 年次校内研修は、2019 年度の実施内容を検証し、次年度へ向けて改善していく。</li> </ul>
-----	---

### 3 学校経営の状況

#### □組織運営及び教職員研修の状況

（関連アンケート番号：教職員 5, 13, 14, 15, 18、生徒 4, 5、保護者 3）

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 平成 30 年度、開校 10 年目・附属中学 2 年目を迎え、新しい職員も多く、今まで以上に教育理念、教育方針、教育目標について、全教職員が共通理解を持ち、一体となって教育活動にあたるように学校経営に努めた。</li> <li>・ 年次研修を中心に積極的に研究授業を行い、参観を通して授業改善を行うとともに、生徒たちの実態を観察することで生徒への理解を深める取組を行った。</li> <li>・ 高大接続・学習指導要領の改訂にともなう教育改革に向けて、探究型学習の推進を図り、組織的かつ計画的にカリキュラムマネジメントを実現するために職員研修会を開催し、共通理解を深めるとともに、多くの職員に校外の研修会への参加を促した。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 月に 1 回、中高合同の職員研修会を開催し、本校の教育理念や教育目標を共有するとともに、体罰、いじめ、SNS 関係、発達障害等、生徒指導関係ならびに職員の服務に関する研修を行った。それにより職員が共通認識をもち、生徒一人ひとりに寄り添った指導につなげることができた。また、高大接続に関わる教育改革の情報を適切に教職員に広めており、校外で行われる授業研究会等に積極的に参加した。（教職員アンケート 13, 14, 15, 18 生徒アンケート 4, 5 保護者アンケート 3）</li> <li>・ サイエンスリテラシー担当の職員による ITC を活用したカリキュラムマネジメント研修を実施し、課題探究型授業の実践力の向上に努めた。（教職員アンケート 5, 18）</li> </ul>

<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究・研修体制が整えられているかの教職員アンケート（2 ページ 18）において、肯定的なポイントが 9 ポイント下がり、他の項目と比べると実現できているという評価が低い。業務量が他校に比べて多いとはいえ、教員の力量向上に努める環境を整えることが課題である。特に初任者研修については、人数も多く授業を参観する機会をいかに実現していくか喫緊の課題である。</li> <li>・開校から 10 年を迎えた現在、本校の黎明期を支えた教職員が異動・退職するなかで、本校の特性を生かした様々な取組について、その本来的な意義や必要性を再評価・検討することが必要である。また、本校を初任とする教員も多くいる現状から、継続・発展に力を注げる教員の確保と力量の向上が必要である。</li> <li>・年次運営の情報の共有化は、80 ポイントを超えてはいるものの肯定的なポイントが下降している。指導上支援を必要とする生徒の情報等を学校全体で共有し、学年単位ではなく学校全体でと統一した対応をすることが必要である。</li> </ul>
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ここ数年は、本校設立時の教員の多くが異動する時期になり、結果として教職員の多くが入れ替わることとなった。新たに着任する教職員に対して本校の設立理念を継承し、全職員が意欲をもって業務に取り組むことができるよう、職員会議や職員研修会等を通じて共通理解を図っていく。</li> <li>・新学習指導要領の趣旨に沿ったカリキュラムマネジメントを組織的に行い、「サイエンスリテラシー（課題探究）」を中心とした教科横断的な視点での授業改善に全教職員が積極的に取り組むことができるよう校内研修会を充実させていく。</li> <li>・教職員の資質・能力の向上を図るための研修会を毎月 1 回設定する。生徒理解研修や授業力向上研修、不祥事防止研修等毎回テーマを明確にし、限られた時間の中で研修会が教職員にとって有意義な場となるよう改善を図っていく。</li> <li>・31 年度は、附属中学校も開校 3 年目を迎え全ての年次・学年が揃う。中高一貫教育校の充実に向けて、引き続き校務分掌や校内委員会の業務の整備を行い、中・高職員の融合に取り組む。</li> </ul>

## □学校に関する情報公開の状況

(関連アンケート番号：教職員 27、保護者Ⅱ-5、生徒Ⅱ-5、地域 9)

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページの各ページの確認と訂正、更新について、原稿内容は管理職が確認し、タイムリーに更新するよう努めた。 特に本校の特色を示すページについて、追記・修正を進めるとともに、30年度の活動内容を発信するよう努めた。</li> <li>・保護者・生徒向けの紙面での情報（年次だより・月間予定・保健室だより・SCIENCE LIBRARY・他）は、例年通り、タイムリーに発信するよう努めた。</li> <li>・外部への情報公開事業（学校説明会、オープンスクール、合同説明会）において、本校の特色の理解強化を図るための改善に努め、学校説明会などでの説明内容や、学校案内、Science Frontier Newsなどの内容の充実と改善に努めた。</li> </ul>
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・29年度同様、ホームページの更新作業は思いのほか複雑で、横浜市セキュリティシステム強化の影響もあって、時間のかかる作業ではあるが、30年度もタイムリーに更新し、Diaryは生徒の活動とその成果を多く発信できた。また、SSH、SGHに関するページの改善、発信内容の追加ができた。</li> <li>・保護者・生徒に向けての公開すべき情報は、30年度もおおむね満足いただける対応ができたと考える。タイムリーに情報を提供するために、原稿作成に対する職員の協力体制が円滑に進んだ成果である。(集計結果2ページ教職員アンケート27、6ページ保護者アンケートⅡ-5)</li> <li>・進学状況、年間予定、ホームページ部活動のページなど、年度初めに発信すべき情報をスムーズに更新することができた。</li> </ul>
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な情報をタイムリーに提供することに各部署で努めてきたが、広報活動の評価（経年変化6ページ27、10ページ5、）に低下のポイントが若干見られる。職員には広報内容を報告・伝達する機会をタイムリー設定し、理解を深めていただく必要がある。また生徒には、紙面での情報提供をスムーズに保護者へ伝えることの大切さを理解してもらう指導を続けていく必要がある。</li> <li>・ホームページは広い範囲に情報を公開しているもので、記事は本校関係者だけではなく、多くの目に触れるものである。内容は十分吟味して作成していかなければならないことを常に意識し、関係各位にご理解いただく必要がある。</li> </ul>

<b>改善策</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 30年度と同様に、スピーディーな情報発信を進め、特色ある教育活動をさらに広く周知していくために、定期的に情報公開していく。</li> <li>・ ホームページの記事も十分検討して作成していくとともに、更新等の流れについて再度職員間で確認し、よりスムーズな原稿作成を目指す。ただし、文章・写真等の内容チェックなど必要な部分にはしっかりと時間をかけてミスのないよう努める。</li> <li>・ ホームページは多くの方の目に触れるものである性格上、保護者・生徒への連絡機関とはなりえないことを伝える。</li> <li>・ 生徒には、担任を通じて配布物の目的を配布時に説明し、保護者と共に情報を活用してほしいことを積極的に伝える。</li> </ul>
------------	---

#### 4 いじめへの対応に関する項目

##### □いじめへの対応

(関連アンケート番号：教職員 28、生徒Ⅲ-4、5)

<b>取組</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 年度当初、全教職員に「いじめ防止基本方針」の周知徹底を行った。</li> <li>・ 年2回の生徒向けアンケートを教職員で点検・情報共有し、早期対応を行った。</li> <li>・ いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、情報収集・共有を迅速に行った。</li> <li>・ 指導方針はいじめ防止対策委員会で決定し、組織的に対応した。</li> <li>・ 特別支援委員会との情報共有を積極的に進めた。</li> </ul>
<b>成果</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 年度当初、教職員にいじめに対する組織的な対応を周知したことにより、教職員が迷わず指導を行うことができた。さらにいじめ事案の発生時には早期対応をとることができた。</li> <li>・ 生徒へのアンケートをきめ細かく点検することで、教職員の生徒理解につながった。</li> <li>・ 組織的な対応をとることにより、教職員一人ひとりが高い意識をもっていじめ問題に取り組むことができた。</li> </ul>
<b>課題</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ いじめの未然防止の観点を盛り込んだ人権教育の推進が必要である。</li> <li>・ 生徒への聞き取りの仕方など、より一層の生徒理解（傾聴）に向けた研修が必要である。</li> <li>・ 特別支援教育とのより一層の協力体制の構築が必要である。</li> </ul>
<b>改善策</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 年度の初めに本校のいじめ防止基本方針を教職員で共有する。あわせて特別支援教育の確認も行う。</li> <li>・ 教職員向けの生徒指導研修を行い、教職員のさらなる生徒理解を目指すとともに、生徒理解の第一歩であるあいさつを教職員も心がけ、生徒への普段の声掛けの充実させることを研修の中で確認する。</li> </ul>